

「毒をもつて、良識を制す」 毒の魅惑と効用

毒薬、毒ガス、毒殺、毒牙、毒キノコ、毒婦……。
毒婦をのぞけば（？）、こんなものはないほうがいいに決まっています。
ですが、しかし、「毒」はときに、人間の味方となる！
毒の魔力を、坂崎重盛さんに綴ってもらいました。

随文家

坂崎重盛

●さかざき・しげもり 1942年東京生まれ。千葉大学造園学科卒業。横浜市計画局勤務後、編集者・随文家に。近著に『粹人粹筆探訪』『絵のある』岩波文庫への招待（ともに芸術新聞社）、『ほくのおかしなおかしなステッキ生活』（求龍堂）など。

「毒」の話をしよう。

毒——なにか凶々しい言葉だ。毒薬、毒ガス、毒殺、毒牙、毒キノコ、毒婦といった存在もある。毒は人の体や心を損ない、蝕む。

健全、健康を志向する世の中では、毒といったものは、ないほうがよい存在だろう。

しかし、まてよ……。 「毒」という言葉の周辺には、なにか、えもいわれぬ、心ひかれる気配も感じる。

マイナスやネガティブなものもつ魅力か。

それは、たとえば正義の二枚目の主役ではなく、ア

「真実」もある。

それが、人間

「体にいいこと」とは逆の方向。日々の生活の中で「体に悪いこと」に心ひかれることはないだろうか。早く寝ればいいものを、深夜までDVDを見ている。よせばいいのに二軒三軒ハシゴ酒をしてフトコロと体力を消耗する。ダイエットしなければならぬのに、ついドカ食いしてしまう。

「体にいいこと」どころではなく、「体に毒になること」をしてしまう「真実」がある。

そう、「毒」という言葉には、マイナス、ネガティブなイメージがあるが、一方そこには「真実」というニュアンスも感じられるのではないだろうか。

たとえば「毒舌」。

あたりさわりのない、きれいなこと物言いに對して「毒舌」。これは真実の言である。「巧言令色」に真つ向から對する言葉である。

「毒」がかもしだす魅力は「もうひとつの真実」にあるのではないだろうか。

ウトロ—的な敵役であり悪役。陽に對する陰、昼に對する夜。光に對する闇、表に對する裏——。

昨今の新聞を開けば、健康に関わる広告がめぐる押しなのに気づかされる。「いつまでも健康で長生き」。もちろん結構なことですよ。誰もが望むことで誰とでもこれを否定しない。

「体にいいことしてますか!」。世を挙げての健康ブーム、いや、健康マニアといつてもいいだろう。

しかし人間、そうは二筋繩にはいかない。

人間が生きてゆく、その裏には、もうひとつ別の

「毒婦」——怖い女だ。だからこそ、男はそこに引き寄せられ、手玉にとられ、その女の魅力の毒牙にかかると。この世に女がいる限り、女性のひとつの典型としての毒婦がいる。昔もいたし現代も出沒する。

そして、わたしたちは、そんな毒婦の生きたストーリーを知ることが好きである。なぜなら、そこに人間の「もうひとつの真実」を見るからだろう。

どうやら人間というものは、表面は健全、健康を志向しているながら、もう一方では、真逆のことにひかれるところがあるらしい。

「やらなくてもいいことをやる。いや、やらないほうがいいことをやる。やってはいけないと言われると、なおさらやりたくなる」

なぜそんなことをするのだろうか。それが、人間だからだ。人間とはそういうものなのだ。

たとえば、タバコなど喫う必要がないのだ。ぼくはもともとタバコのみではないので痛くもかゆくもないのだが、昨今の「嫌煙権」の徹底ぶりは凄いですね。タバコを喫う習慣の人たちは、灰皿のある場所に寄り集まり、コソコソと気の毒なくらい。

こうなると、タバコを喫わない側も、かつてはさほ